イナズマイレブン　第X話「勉強やろうぜ！」

キラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
イナズマイレブン　第Ｘ話「勉強やろうぜ！」

【Ｎコード】
Ｎ１０２０Ｑ

【作者名】
キラ

【あらすじ】
ＦＦＩも終わり、雷門中サッカー部は来年のフットボールフロンティアに向けて日々練習を積んでいた。そんな折近づいてくる期末試験。赤点を取らないために、勉強会を行うことになるのだが……
（腐はないです。シリアスもないです。あと後篇はちょっと夏未びいきかも）

前篇　勉強会！（前書き）

はじめての方ははじめまして。そうでない方はおはこんばんにちは。キラと申します。
今回は初めてイナズマイレブンのＳＳに挑戦してみました。劇場版でテンションあがリーヨしたのが原因です。
本当は短編にしようと思ったんですが、ちょっと長くなりそうだったので２話にわけました。
皆さんの好きなキャラは誰ですか？僕は円堂と吹雪と夏未が好きです。

では、どうぞ。

前篇　勉強会！

世界の強豪が集まり、地球最強のサッカーチームを決める大会となったフットボールフロンティア・インターナショナル。激戦の末世界の賜杯を勝ち取った円堂守率いるイナズマジャパンは、再びそれぞれの学校へ散り、そして誓い合った。

———来年のフットボールフロンティアで、また会おう。

「ファイアトルネード！」

雷門中のエースストライカー・豪炎寺修也の放ったシュートが、炎を纏ってゴールへ一直線に突き進む。

恐ろしい威力のシュート。一般人に当たればたちまち吹き飛ばしてしまうだろう。

だが、ゴールの前に立つ赤いバンダナをつけた少年――――円堂守は、脅えるどころか挑戦的な目つきで真正面から向かい合う。

「ゴッドハンド！」

直後、円堂の右手から光輝く巨大な手が出現し、飛んできたボールと衝突する。

力と力のぶつかり合い。まわりに強風を巻き起こすほどの激突を制したのは――――

「……へへっ」

がっちりボールをつかみ、無邪気な笑みを浮かべる円堂だった。

「はいそこまでー！今日の練習は終わりよー！」

マネージャーの木野秋の合図で、放課後の練習は終わりを告げる。

「いや～、やっぱり豪炎寺のシュートはすげーよな！俺ももっともっと頑張らないと！」

帰る支度をして、チームメイトとともに部室を出た円堂は、先ほどの練習を振り返っていた。

「よーし、早速鉄塔広場に行って練習だ！」

と、いつものように気合いを入れていたのだが。

「円堂、お前今日もあそこに行くのか？」

怪訝そうな表情を浮かべ、隣を歩く風丸一郎太がそう尋ねてくる。

「ああ、当たり前だろ？」

「いや、でも……もうすぐ期末試験だぞ」

「確か、円堂は学年最下位だと聞いているが」

心配する風丸と、雷門で試験を受けるのは初めてである鬼道有人。しかし円堂はそんなことなどどこ吹く風のようで、

「大丈夫だって。テストの成績が悪いのなんていつものことなんだし、今更必死になって頑張ることもないだろ」

と、あくまで楽観的な考えを述べる。

「……円堂。もしかして知らないのか？」

「ん、何がだ？」

まさかという顔つきになる風丸に、円堂は頭に？マークを浮かべる。

「前の試験も、その前の試験も赤点だろ。ということは……」

「3回連続で赤点を取った生徒は、1ヶ月間部活動禁止で補習よ」

風丸の言葉を引き継いだのは、いつの間にか近くに来ていた雷門夏

未だった。

……だが、誰が言ったかなどということは問題ではない。

「え……？」

重要なのは、その内容だ。

「えええええっ！？う、嘘だろ夏未！？俺そんなこと聞いてないぞ！」

「ちゃんと生徒手帳に書いてあります！それにこの前だって先生から話があったはずよ」

大方居眠りでもしていたのだろうけれど、と付け加える夏未。非常に的を射た意見だとうなずく一同。

「そ、そんなあ……で、でも俺勉強苦手だし、サッカーの練習やりたいし……」

「いくら世界一のチームのキャプテンだったとしても、学生の本分は勉強よ。例外は認められません」

「やっぱりそうか……」

なおも食い下がろうとする円堂だが、夏未にばっさり切り捨てられ、がくっと下を向く。

「1ヶ月もサッカー部に行けないなんて……一体どうすればいいんだあ」

「今から勉強するという選択肢はないのか……」

早くもお通夜モードに突入している円堂に向かって、豪炎寺がそうつぶやくが。

「あと5日だぞ！授業を全然聞いてない俺が赤点取らないなんて無理だ！」

なぜか自信満々で返された。サッカーならどんな困難でも努力と根性でなんとかしてしまう熱血キャプテンも、こと勉強に関しては手も足もでないらしい。ちなみに、豪炎寺は父親から後継ぎになれと言われたこともあるほどなので、当然成績は良い。

「数学、英語、物理……」

サッカーの代わりに補習を受ける日々を想像しているのか、どんどん顔が青ざめていく円堂。

「……なら、その壁を乗り越えればいい」

だが、ここで鬼道が意味深な言葉を放つ。

「壁を、乗り越える……？」

「サッカーと同じだ。パワーアップするためには、みんなで特訓あるのみ」

疑問符を浮かべる円堂に、鬼道は口元に笑みを浮かべながら言った。

「———勉強会をするんだ」

というわけで、鬼道の提案により勉強会という名の合宿が行われることとなった。

翌日、その旨を2年のメンバーに伝えていると、1年生達も参加したいと言い出したので、結局大人数が泊まれるよう学校を借りることとなった。部活動をするわけでもないのにそんなことが許されるのかということについてだが、夏未が円堂の成績の悪さを主張し続けた結果、なんとか許可が下りることとなったのだ。もちろん、夏未はこのことを円堂には黙っていたが。

……しかし、実際円堂の馬鹿さ加減は相当なものであって。

「6／25＋57／130＝？ん～…63／155かな」

「おい円堂……冗談だよな」

あっさりととんでもない誤答をする円堂に対し、苦笑いの風丸。

「え、どこか間違ってるのか？」

「……あ、あはは」

声も出ない風丸に代わり、秋が解説を行う。

「円堂君、１／２って１の半分だよね」

「ああ、そうだな」

「じゃあ、１／２＋１／２は？」

「そんなの１に決まって……あれ、２／４になるぞ！？変だなあ」

「うん、だからそこが間違ってるのよ。分数の足し算っていうのはね、まず通分をしなきゃ」

「……もう木野ひとりに任せようかな」

なんだか自分が役立たずな気がした風丸は、そんなことをつぶやいていたという。

一方、少し離れたところでは。

「……文章題１５問、完了だ」

と満足げな表情の鬼道。

「俺もだ」

豪炎寺もほぼ同じタイミングで解き終えたようで、２人は互いに見つめうと、薄笑いを浮かべる。

「…なかなかやるようだな、豪炎寺」

「…そっちもな」

だがその時。

「甘いわね。私はもう２０問解いたわ」

誇らしげな顔をして、夏未が乱入してくる。

「何！？…ふ、だがここからが本番だ」

「次の分野は図形…俺の得意分野だな」

「あら、言っておくけど私に弱点はないわよ」

そして、再び高レベルな争いが始まるのであった。

さらに別の一角。

「だあ～もう！わかるわけねえだろこんな問題！」

「まあまあ、落ち着きなって染岡」

「……円堂ほどじゃないんだろうけど、染岡を教えるのも大変だな」

物理の問題に苦戦し叫ぶ染岡竜吾をなだめるマックスこと松野空介と、その横でため息をつく半田真一。

「…つか、なんで勉強なんてしなくちゃいけないんだよ。生きていくために必要なことなのかよ！」

「そんなこと言われてもねえ……やっぱいい職につくためには必要だし」

いら立つ染岡に対し、半田は当たり障りのない回答をするが。

「うわ～、超普通の答えだ。さすがは毎回ぴたりと平均点を取る男だね」

「なんだとォ！平均取って何が悪いんだよ！そんなに中途半端って言いたいのかマックス！」

「自分で言ってんじゃん……」

「ハッ……どうせ俺は何やったって中途半端ですよ～だ」

マックスとのやり取りの末自爆した半田は、そのまま体育座りをして床に『の』の字を書き始める。

「……おいマックス。半田の奴なんか落ち込んでるぞ」

「だいじょーぶ、ほっとけば復活するよ。それより、木野あたりを呼んできて手伝ってもらおうかな」

問題とにらめっこしていた染岡は事態がわからず戸惑うが、マックスはテキトーに流すだけだった。

「……なんだか先輩達、大変そうッスね」

「キャプテンと染岡さん、やっぱり勉強できないんでやんすね…」

「見た目からしてそうだもんな……」

「それはそうと、さっきから半田さんが落ち込んでるみたいだけど、どうしたのかな……」

上から順に、壁山塀吾郎、栗松鉄平、宍戸佐吉、少林寺歩が、それぞれ勉強している2年生の様子を見て感想を述べる。

「こらっ！あなた達も人のこと言ってられるような状況じゃないでしょう！とっとと勉強しなさい勉強！」

「「「「「は～い」」」」」

やかまし……もとい音無春奈の一喝であわててノートに向き合う4

人。

「まあ、わからないところがあれば僕に聞いてください。完璧なアドバイスを与えてあげましょう」

「…あの、目金先輩？自分の勉強はしなくていいんですか？」

当然のように1年生のグループに混じっている目金欠流にそう声をかける音無。

「ふふ。大丈夫ですよ、僕はあなた達に時間をささげるつもりですから！」

「（自分が勉強したくないだけだな……）」

目金の言葉に、1年生は全員同じ考えに至るのだった。

そんな感じで、どうにかこうにか勉強会は進んでいき。

「なあ夏未。この漢字、なんて読むんだ？上が馬で、下は…なんだこの字？」

「あなたそんな漢字も読めないの！？バカよ、バカ」

「な…そこまで言うことないだろ。ちゃんと答え教えてくれよ」

「バカ！」

「だから教えてくれって！」

「ば・か！！」

「だ～もう！なんなんだよ～！！」

コントのようなやり取りがあったりしたものの。

「……ここ、あってるかな」

「ああ……」

影野仁と闇野カゲトは静かすぎて誰にも気づいてもらえなかったということもあったものの。

とりあえず、就寝の時間にまでこぎつけた。

前篇　勉強会！（後書き）

いかがだったでしょうか？後篇は恋愛ネタを中心に展開していく予定です。
よろしければ、感想や評価をいただけるとうれしいです。

では、また後篇で。

後篇　鈍感は辛いよ（前書き）

何度見ても６１話＆６２話は飽きません。
そしてイナズマイレブン４のＰＶが公開されましたが…なんかやばい感じですね。僕の知ってる超次元サッカーと違う…まあ楽しみだけど。早く１０年後のみんなが見たいです。

後篇　鈍感は辛いよ

電気は既に消されていて、体育館の中は真っ暗闇。

そんな時、風丸一郎太は布団の中であることに思い悩んでいた。

……円堂守と、彼に好意を持っていると思われる女子達についてだ。

「（本当は、俺が気にするようなことじゃないんだけど……）」

たとえ親友のことだとしても、他人の恋路にとやかく言うような筋合いは誰にもない。それはわかってはいるのだ。

わかってはいるのだが……

「（あいつが鈍すぎるのがいけないんだよな……）」

円堂守は、その熱い心でみんなを引っ張っていく、まさにカリスマ的存在だ。たとえ相手が誰であろうがわけ隔てなく接することができる。もちろん、男も女も関係ない。

だが、そこが問題でもある。男女の差をほとんど意識しないが故、おそらく恋愛感情などというものを抱く機会がないのだ。そして、当然誰かがその感情を抱いているということを認識することもできない。

そういうわけで、風丸はおせっかいだと感じつつもこうして考え事をしているのだが。

「……円堂、起きてるか」

やはりひとりで勝手に悩んでいても仕方がない。この際本人と話してみよう。そう思い、風丸は豪炎寺をはさんでその向こうにいる円堂の名を呼ぶ。

「……」

返事が返ってこない。

「…円堂なら、気持ちよさそうに眠っているが」

代わりに答えたのは豪炎寺だった。

「ああ、悪い、豪炎寺。起こしちゃったか」

「…いや、もともと起きていた。まだ消灯から3分だ。なかなか眠れるものでもないだろ」

もっともな意見を言う豪炎寺に、風丸はなるほどとうなずく。

「それで？円堂に何か話すことでもあったのか」

「ああ……いい機会だ。他の奴にも聞いてみるか」

風丸はそう言うと、少しだけ大きめの声を出して呼び掛ける。

「今起きてる奴は、自分の名前を言ってくれ」

すると、さほど時間をおかずに次々と返事が返ってくる。

「半田」

「松野」

「鬼道」

「壁山ッス」

「栗松でやんす」

「目金です」

「俺と豪炎寺を入れて…8人か。なあ、みんなにちょっと聞きたいことがあるんだが――――」

「――――ひょっとしてそれは、円堂君の恋愛事情についてですか」

お題を話す前に目金が先読みしたことに、風丸は驚く。

「…どうしてわかったんだ？」

「君が円堂君を呼んだのは聞こえていましたからね。わざわざこんな時に尋ねるということは、なかなか普段は話せないことであるのはすぐにわかる。…そこまで行けば、親切な風丸君のことです、き

っと鈍感な円堂君のために何かしてあげようと思ったのではないのか、と」

「おおー、すげー目金。探偵になれるんじゃないのか？」

「ま、それほどでも…ありますけどね」

感心して褒めるマックスの言葉に、目金は得意げな様子だ。

「まあそういうわけで……みんなわかっていると思うが、円堂守に惚れている女子がいる。木野秋と雷門夏未、それとイナズマジャパンのマネージャーだった久遠冬花。この3人だ」

「うんうん、そうそう…って、あの子も惚れてるの！？俺日本代表に選ばれなかったから全然知らなかったぞ」

さりげなく出された冬花の名前に驚く半田。彼が冬花を見たのは、彼女とその父が雷門に来た時と、イナズマジャパンがライオコット島に行くのを見送りに行った時だけなのだ。

「それが本当に幼馴染だったらしくてな……仲良くしていたぞ」

「キャプテンばっかりモテモテで、なんかずるいでやんす」

「仕方ないッスよ。キャプテンはキャプテンなんスから」

鬼道が軽く説明し、栗松がうらやましそうな声を出し、壁山はなんだか支離滅裂なことを言うが、彼が言いたいことはなんとなくわかるので全員がうなずく。

少しみんなの反応を確認してから、風丸が再び話を続ける。

「それで、だ。円堂は見ての通りサッカー馬鹿だから、まったく彼女たちの気持ちに気づいていない。……どうしたらいいと思う？」

「う～ん……」

恋愛など経験したことのない中学生には難しい質問であるため、一同はしばらく考え込む。

「……まずは、どうしてあいつが気づかないのかを考えてみたらどうだ」

と、ここで豪炎寺が発言する。何かを改善するためには、まずどこ

が問題なのかを探らなければならないという考えによるものだ。

「なるほど、確かにそうだな。誰か意見はないか？」

「あ、はいはーい」

風丸の声に応じたのは、何かを思いついたらしい半田。

「ひょっとして、円堂はもう他の誰かに惚れてるから気づかないんじゃないのか？」

「……それって誰でやんすか？」

「例えば…音無とか！」

ピクッ……

何やら鬼道の布団から音が聞こえたが、半田はそれに気づかず言葉を続ける。

「音無って元気でかわいいだろ？結構学校でも人気あるみたいだし

さ、ひょっとして円堂も――――ってひいいい！！」

ここでようやく鬼道から発せられる殺気に気づいた半田。たまらず叫び声をあげてしまうが、幸い誰も起きない。

「半田……お前、春奈に気があるのか」

「や、やだなあ鬼道クン！そ、ソンナコトアルハズナイジャナイカ」

「あいつ馬鹿だろ……」

『鬼いちゃん』におびえてカタコトになっている半田の声を聞いて、マックスは聞こえないように小さくつぶやくのだった。

一方こちらはマネージャー達の寝ている場所。

「で、お二人はいつキャプテンに告白するんですか？」

「「い、いきなりなんてこと言うのよ！？」」

音無のど真ん中ストレートな質問に、秋と夏未はたじろぐ。

「だってあのキャプテンですよ？告白くらいしないと絶対好きだって気づいてもらえませんよ！」

「そ、それはそうかもしれないけど……」

「……できるなら、苦労しないわよ」

消え入るような声で話す秋と夏未。暗くて見えないが、多分真っ赤な顔になっているんだろうなと音無は思う。

普段はなかなか共通点を見いだせない2人だが、恋愛に関してもう一歩先に進めないところはよく似ている。

「いろいろ臆病になっちゃうのもわかりますけど、このままじゃキャプテンサッカーボールと結婚しちゃいますよ！」

「「サッカーボールと……？」」

「そうです、サッカーボールとです」

その光景を想像する3人。

『みんな！こいつは俺の一生のパートナーなんだ！！仲よくしてくれよな！』

「……なぜかしら、あまり違和感がないのだけれど」

「そうね……」

「たとえが悪かったみたいです……」

おかしな方向で納得し合うマネージャー達。円堂守という少年の並々ならぬサッカー愛が表れている証拠かもしれない。

「と、とにかくですね！」

「…あ、私ちょっとトイレに行ってくるわ」

「ああっ、夏未さん逃げないで～」

音無の追撃を避けるため、秋の虚しい声も聞かずに夏未は部屋を出ていった。

「じゃあこういうのはどうでやんすか？キャプテンは年上好きか年下好きなんでやんす」

「あっ、年下好きなら豪炎寺の妹の夕香ちゃんとかはどうだ？かわいいし明るいし――ってひいいいいい！！」

「半田……お前、夕香に気があるのか」

「や、やだなあ豪炎寺クン。そ、ソンナコトアルハズナイジャナイカ」

「学習しない奴……」

再びおびえる半田を見てマックス他一同が呆れていたその時。

ガサ……

「っ！まずい、円堂が起きるぞ！」

風丸の言葉を聞き、全員が一瞬の内に寝たふりをする。このあたりのチームワークはさすが日本一だ。

「っ……、トイレ、トイレ……」

ふらふらと立ち上がると、円堂はそのままトイレに歩いていった。

「トイレの前まで来てみたものの……いつ頃戻ろうかしら」

別に用をたす必要もない夏未は、音無の口撃を受けない方法を模索していたのだが。

「……あれ、夏未？」

「ふぇっ？え、円堂君！？」

その最中、そもそもの原因となった人物が現れた。

「夏未もトイレか？」

「え、ええ、まあ」

「そっか」

夏未のしどろもどろの返事を聞くと、円堂はそのまま男子トイレに

入っていった。

その時、彼女の脳裏に先ほどの音無の言葉が浮かんでくる。

『告白くらいしないと絶対好きだって気づいてもらえませんよ！』

「（な……何を考えているのよ私は！告白なんてそんなこと……か、帰りましょう。こんなところにいるからおかしなことを思いついてしまうのよ。……でも、今帰っても音無さんに…ああ、でも）」

ひとりで勝手に混乱する夏未。傍から見ると変人にしか見えないのだが、幸い夜の学校の中を覗き見するような人間はいなかった。

そうしているうちに、円堂がトイレから出てきてしまう。

「あれ、夏未？お前も今終わったとこか」

「え？ええ……そうよ」

「そっか。じゃあ、また明日の朝な。おやすみ」

そう言って、円堂は男子の寝床に歩いていこうとする。

「待って、円堂君」

だが気がつけば、夏未は彼を引きとめていた。

「ん、なんだ？」

「（今帰っても、まだ音無さんは起きている……だから、あくまで時間を潰すために）」

「折角だし、少し夜風に当たらない？」

「え？……まあ、いいけど」

「（そう、告白するとかそういうわけじゃ全然なくて、ただの時間稼ぎなのよ。だから大丈夫）」

誰に向かって大丈夫と言っているのかは不明だが、とりあえず夏未の脳内はこんな感じだった。

「う～ん、気持ちいい風が吹いてるな～」

「そうね」

屋上に出た夏未と円堂は、ちょうどいい具合に吹いている風を受け、体を気持ちよさそうに伸ばしている。

「円堂君。あなたから見て、今のチームの状態はどう？」

「ああ、いい感じだ。みんなどんどん成長していってるし……来年のフットボールフロンティアは絶対に２連覇するからな！」

心底うれしそうに述べる円堂を見て、夏未も自然と顔がほころぶ。

「やっぱり楽しみなのね、フットボールフロンティア」

「そりゃそうさ！いろんな奴が参加してくるんだ！帝国は不動が入ってもっと強くなったし、吹雪のいる白恋中や、ヒロトや緑川達がいる御日様中も！虎丸だって来年は中学生だし、飛鷹もサッカー部に入ってどんどん力をつけてきてる。それから―――」

「もういいわ。あなたの気持ちは十二分に伝わってきたから」

このまま待っていると延々と話が続きそうだったので、夏未は途中で円堂の言葉を止める。

「…それにしても、たくさんの人と出会ったわね」

「そうだな……」

夏未の言葉に、円堂は感慨深そうにうなずく。今までの出会いを思い出しているのだろうか。

「……やっぱり、あなたはすごいわ」

「へ？」

首をかしげる円堂に、夏未は話を続ける。

「何もないところからサッカー部を立ち上げ、仲間を集めて日本一に。そしてその後も様々な人々と共に戦っていき、気づいてみれば世界一のチームのキャプテンになっているんだもの。それを可能にした、あなたのプレーと情熱、そして人を引きつける力は、誰にもないものよ」

「そ、そうかな……でも、俺ひとりの力じゃ何にもできなかった。みんながいたから、今の俺がここにあるんだ」

「確かにそうね。でも、そのみんなをひとつにまとめ上げたのは円堂君よ。……私も、そのひとりだし」

思い出されるのは、昔の弱小サッカー部を嫌っていた自分の姿。

「憶えているでしょう？最初、私があなた達にきつく当たっていたこと」

「そーいやそうだったなあ。今だから言えるけど、あの時は俺、お前の顔見るたびに『うわっ、出た！』って思ってたんだ」

「知っていたわ。あなた、すぐ顔に出るから」

「ありゃりゃ」

しまった、という顔をする円堂。だが、昔のことなので夏未はもう気にしてもいない。

「あんなに汗水たらして泥だらけになって、サッカーなんて何が楽しいかしら……あの時はそう思っていたわ」

今思えば、つくづく馬鹿だったなと感じる。

「でも、どんな逆境にも負けずに、何度倒れても立ち上がるあなたの姿と、それに応えるように奮起するみんなを見ているうちに、サッカーが大好きになっていた」

「へへっ、俺もうれしいよ！サッカー好きな奴が増えてくれて！」

夏未の話を聞いた円堂は、満面の笑みでそう言った。

その笑顔に、夏未の胸が高鳴る。

同時に、今の状況に考えが及ぶ。

――夜、屋上で2人きり。月と街の明かりがちょうどよくマッチしていて、幻想的なムードを作りあげている。

今言わなければ、いつ告白できるというのか。

「円堂君」

「なに――って、夏未……？」

急に夏未の表情が変わったのを見て、円堂は少し驚く。

「……私……もうひとつ好きになったものがあるの」

「……なんだ？」

「それは……」

何をやっているんだ。ここでもう一歩踏み出さなければ、一生このままだ。

「私が好きになったのは……」

勇気を出して———

「円」

どーーーーん!!

瞬間、何が倒れるような大きな音が屋上に響き渡った。

驚いて2人が音のした方を振り向くと———

「いててて……栗松！お前が倒れるから見つかっちゃったじゃないかよ！」

「それはないでやんすよ！半田さんがもたれてくるからバランス崩したんでやんす！」

屋上の出入り口のあたりで重なって倒れている、男子達の姿があった。

「お、お前ら一体……」

「いやあ、円堂遅いなあって思って探しに来たんだけど……」

「ささ、構わず続けてもらっていいよ」

円堂の問いに風丸が答え、マックスはにやにや笑って夏未に続きをうながす。

「そうだった、夏未、それで好きになったものって――――あれ？夏未？」

円堂が振り返ると、拳をわなわな震わせ、顔を真っ赤に染めた夏未がいて――――

「さっさと寝なさーーーーーーい！！！！」

「「「「「「「はいいいいいいいい！！」」」」」」」

人間の限界を超えたんじゃないかと思うくらいの叫びを浴び、円堂達は猛ダッシュで寝床まで帰って行った。

翌朝。

「なあ夏未。もうひとつ好きになったものって結局何なんだ？」

「知らないわよ、そんなもの」

「だって昨日言ってたじゃないか。あそこまで言われると気になってしょうがないんだよ」

「知らないったら知らない！！」

「やっぱり恥ずかしがって言わないなあ」

円堂と夏未の会話を少し離れて見ている昨晩起きていた面子。マックスが今の状況を口にすると、半田がじれったそうに声を出す。

「もう言っちゃえばいいんだよ！そしてそのまま付き合うんだ！」

「…へえ～、半田先輩は夏未さんを応援しているんですか」

「って音無と木野！？いつの間に……」

「そ、そうなんだ…半田君」

「あー、半田が木野を落ち込ませたー」

「男として駄目でやんす！」

「悪いッス！」

「確かにデリカシーがないな」

「風丸まで…お前らよってたかって責めてくるなあ！ち、違うんだ木野、そういうことじゃなくて――――」

「なあ、教えてくれってば～」

「しーらーなーい！！」

なんやかんやあるけれど、今日も雷門中サッカー部は平和です。

後篇　鈍感は辛いよ（後書き）

というわけで終わりです。主役は円堂、ヒロイン夏未、道化役半田でお送りいたしました（笑）半田いじるの楽しいな～。
一応補足ですが、ＦＦＩの後なので土門と一之瀬はいません。あと不動が帝国に行っただとか御日様中とか捏造ですのであしからず。
でも不動の帝国入りは十分ありそうですけどね。
思いつきで始めた作品でしたが、そもそもの理由は劇場版で興奮してこのサイトにある小説読んでみようかな～と思ったら作品が少ないことに絶望し、さらに円堂達原作キャラが出ている作品で最もポイントが高いのが５０に達していないという不遇っぷりに泣いたからです。もっとイナイレ二次創作をこのサイトに広げようという趣旨です。……腐は苦手だけど、好きな人もいるから仕方ないですね。

感想などあれば送っていただけるとうれしいです。そこそこ反響があればまたイナイレ二次創作書くかも…

では、また会う機会があればお会いしましょう。ありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1020q/

イナズマイレブン　第X話「勉強やろうぜ！」

2011年1月16日01時29分発行